

# 高大連携による大学授業公開とキャリア教育

九州大学人間環境学いつでもオープンキャンパスの点検

人間環境学研究院 吉本 圭一  
人間環境学府博士後期課程 山田 裕司

## 1. 課題の設定

本稿は、九州大学人間環境学研究院の教員がそれぞれの担当する学部における専門教育等の講義・演習を高校生に授業公開する「九州大学人間環境学いつでもオープンキャンパス」事業を対象として、参加高等学校でのアンケート調査結果をもとに、その「キャリア教育」としての効果の検討を行うことを課題とする。

### 1) 「高大連携」における「キャリア教育」

近年、さまざまな形態での「高大連携」が進展し、高校生の単位取得につながるアドバンスト・プレースメントとしての授業公開をする大学も出てきている。すなわち、大学にとって「教育・研究とならぶ第3のミッションとしての社会貢献」としての位置づけとともに、入学者受け入れ確保の観点からこうした事業展開が進んでいる。この拡大の契機となったのは、1999年の中央教育審議会『初等中等教育と高等教育との接続の改善について』（答申）である。ここでは、AO入試などの入試多様化を示唆するにとどまらない「高大接続 articulation」についての提言がなされた。答申では、高校と大学の連携の強化を通して高校生のための「ガイダンス機能の充実」を、そしてそうした活動を通して大学生へのオリエンテーションの機能も高めていくことが期待されたのである。また重要な点として、狭く「教育段階間の接続」を論じるだけでなく、それを、その後の「職業生活への接続」と組み合わせて「職業観・勤労観」の形成における接続性として取り扱っている。また、接続の確立のための方法論として、「職業生活との接続」に関して提案された「キャリアアドバイザー」も、教育が専門職の独占物ではなく、学外関係者との連携、双方のコンビネーションによって効果的に機能するという思想を含意しており、連携が前面に出ている答申と見てもよいのであろう。

さて、この「ガイダンスの機能」とは、1999年の学習指導要領改訂で用いられた総則の基本理念のひとつであるが、それは、その後「キャリア教育」へと発展し、2003年度からの『若者自立・挑戦プラン』の総合的な政策課題の柱として位置づけられている。すなわち、2004年の文部科学省『キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書』で、「キャリア」とは「個々人が生涯にわたって遂行する様々な立場や役割の連鎖及びその過程における自己と働くこととの関係付けや価値付けの累積」として定義され、「キャリア」概念に基づき、「児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育」を「キャリア教育」と位置づけている。

## 2)「高大連携」における目的・目標の明確化と点検の課題

実態をみると、1999年度の福岡県の事例でも、普通科高校を中心として101校の県立高校中27校で、大学の授業見学・履修、大学教員の出前授業などの「高大連携」が行われていた(福岡県2000)。

また、文部科学省(2003)は1999年以降の高大連携事業の取り組みを、「大学の科目等履修生、聴講生又は公開講座などの制度の活用状況」と、「大学教員による高等学校での学校紹介や講義等の実施状況」別にまとめて公表した。高大連携事業を実施する目的及び目標別の分類は、(a)高校生が、大学の授業に参加することで、進学意欲を培うことを目的とした連携、(b)大学の授業に参加した学習の成果を高等学校の単位として認定する連携、という二つのパターンになる。高大連携事業の取り組みは、2000(平成12)年から2003(平成15)年の4年間で、(a)が68校から528校へ、(b)が49校から257校に、それぞれ増加していた。

全国の高大連携事業の取り組みを分析した勝野(2003)は、高大連携事業の課題は、大学側の取り組みにあり、大学側が、高等学校に対して、取り組みの主たる対象・実施概要・形態等を明確に把握できていないという。そのため、各高等学校は、それぞれの実情に即した連携策を必ずしも適切に選択・実施することができず、両者のミスマッチを解消できないでいる。

さて、九州大学人間環境学研究院では、2001年度から「高大連携による高校生の大学授業参加」の事業を「九州大学人間環境学いつでもオープンキャンパス」(以下、九大OCと略称する)として展開している。ここでは、単なる学生募集に留まることなく、「異界としての大学」のありのままを伝えるという、高校生への「キャリア教育」を狙いとして事業を進めている。本稿では、以下、こうした事業が、どう活用されているのか、その点検と改善のためのアンケート調査の検討を行う。なお、本稿は、第1、第2節を吉本が、第3～第6節を山田が担当した。



写真1：2001(平成13)年度前期・教育学部「教育システム」の授業風景

## 2.「九州大学人間環境学いつでもオープンキャンパス」の歩み

九大OCは、「九州大学と福岡県教育委員会との連携に関する勉強会」(2000年12月～2001年5月)での検討から生まれたものである。勉強会では、その段階での高大連携事例の検討を行い、「大学人の協議体が卓越した高校教員から学ぶ」「高校教員の団体・組織が大学の専門家の講演を拝聴する」「中央の場での限られた高校教員・大学入試関係者のテーブル」など以外に、高校関係者と大学関係者が「接続と連携」の課題を論じる場を作ったことが何よりも明らかになった。そして、出前授業では結局のところ高校生向けに編集された内容を伝えることになり、大学教員と学生との相互作用で創りだされる大学という学習の場そのものとは異なるものとなると考えられた。

他方、アドバンスト・プレイズメントの場合、その改革としての意義は大きいですが、どのような分野のどのレベルの教育内容が高校生のアドバンスト・プレイズメントに適しているのか、先導的・試行的な取り組みなくしては実施に移しにくい。そこで、九州大学に関心を持ち、比較的交通の至便な高校に呼びかけて、大学の授業空間をそのまま見せるという事業形態を企画することとなったのである。

そうした勉強会から事業立ち上げが円滑に進んだ背景には、九州大学側では実践課題開発型の高等教育学拡充への期待が大きくあり、また福岡県教育委員会では公立進学校の受験シフトの是正が大きな課題として意識されていたことがあげられよう。関連して、九州大学と県教育委員会における教育学部のインターンシップ受入なども同時並行して始まっており、連携拡大への両者の関心が重なっていることが確認され、「高大連携を通じた授業公開」の実現に至ったわけである(吉本2002)。

九州大学人間環境学研究院では、表1のように、2001(平成13)年度の前期から高大連携事業として授業公開を行い、2004(平成16)年度までに、表1のように、延べ580名の生徒が九州大学のキャンパスに来て大学の授業に参加している。これまでの実施において、大学側の事務局は、教育学部地域連携ワーキング・グループ、高等学校との連絡や調整・大学との連絡等の高校側の事務局は、福岡県教育委員会高校教育課が担当してきた。

表1 各年度の九大 OC における高校生の参加数と大学授業数

	参加 高校数	参加 生徒数	受入可能 な大学 授業数	実際の 受入大学 授業数	開講日数	実施期間	授業を開講した学部
平成13年前期	4	140	17	13	31	5/22 - 7/10	教育学部, 文学部, 工学部
平成13年後期	3	54	11	11	47	11/5 - 12/21	教育学部, 文学部, 健康科学センター
平成15年後期	11	223	22	18	35	11/4 - 12/18	教育学部, 文学部, 工学部, 理学部
平成16年後期	10	163	11	11	39	10/18 - 12/16	教育学部, 工学部
総計(延べ)	28	580	61	53	152		

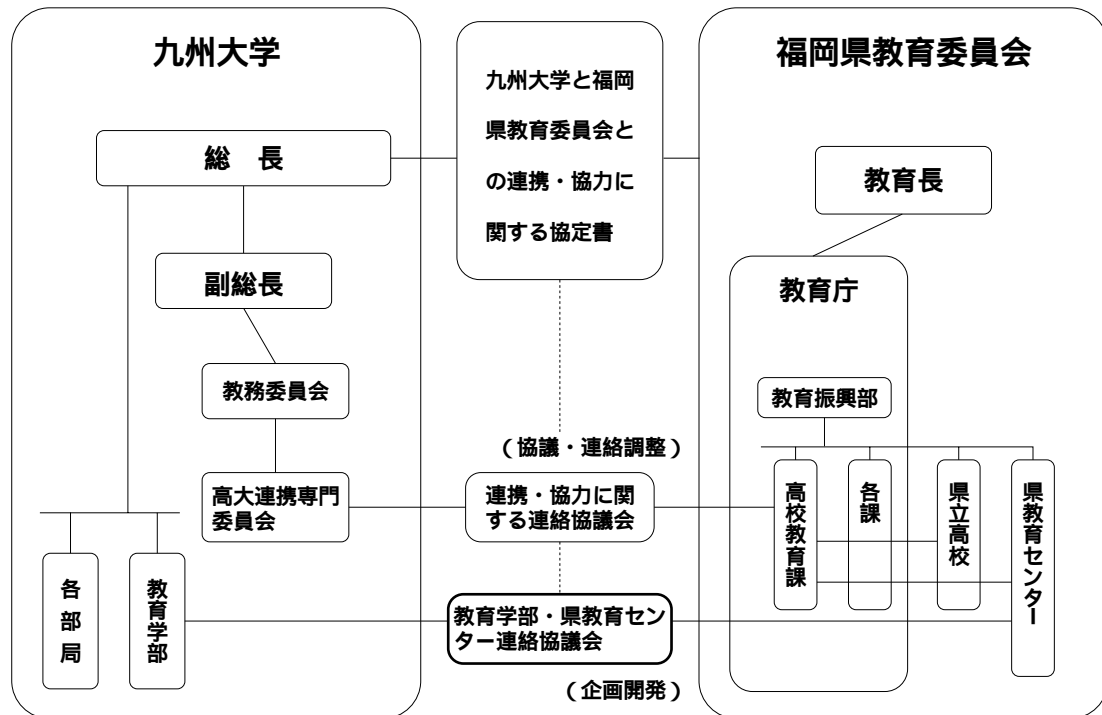
注)平成13年後期の「開講日数」は、開講予定日数。



写真2：2001(平成13)年度前期・文学部「比較宗教学概論」の授業風景

また、2002(平成14)年5月21日には福岡県教育委員会と九州大学とで、「九州大学と福岡県教育委員会との連携・協力に関する協定書」に調印するにいたった。さらに、教育学部と福岡県教育センターとの連絡協議会など、この連携・協力を推進するための関連の連絡協議の場も、図1のように設置されて今日に至っている。

図1 九州大学と福岡県教育委員会との教育連携のネットワーク



これらの企画・実施を経て、本稿の分析対象とする2003（平成15）年度後期「九州大学人間環境学研究院いつでもオープンキャンパス」が実施されている。この年度の九大 OC 実施にあたっては、九州大学から福岡県教育委員会高校教育課に高校生の受け入れ可能な18科目( 講義・演習 )の日程・受講条件・大学生向けのシラバスを提出して、県教委から高等学校に高校生の募集をする形式をとり、県教委が高校生の希望を調整した。高校生を受入れた授業数14科目に対して、11高等学校から197名の高校生が参加した。

### 3. 「高校生のキャリア設計と進路学習に関する調査」の概要

2003（平成15）年度後期の九大 OC に関して、教育学部地域連携ワーキング・グループは、事業に参加した高等学校の生徒（参加者・不参加者をも含む）に対して、「高校生のキャリア設計と進路指導学習に関する調査」を行った。本調査の目的は、九大の学部授業に参加した高校生が、九大 OC やさまざまな進路学習を自分のキャリア設計にどのように位置づけて活用しているのか、また非参加者と参加者の違いはどこにあるのか、九大への進路希望を持つものとそれ以外でどのような違いがあるのかなど、大学の学部教育が高校生の進路学習にいかなる機能を果たすことができるのかを検討することである。これは、ひいては平成16年度以降の九大 OC の実施に関わる事業の在り方を検討する際の参考情報に資することを狙いとするものであった。

調査対象校は、九大 OC に参加した高等学校11高校のうちアンケート調査への協力が得られた9つの高校である。また、調査対象者は、九大 OC に参加した生徒を含むクラス全員、また、その他にも協力可能なクラス全員とした。その結果、福岡市内の4つの高等学校から367名、福岡市外の5つの高等学校から504名の調査協力者が得られた（表2）。

表2 高等学校の所在地別・九大 OC の参加者数

	参加者	不参加者	合計
市内（4校）	13.9	86.1	367
市外（5校）	18.3	81.7	504
合計	143	728	871

調査の方法は、各高等学校が調査可能な日程に合わせて調査票を郵送し、記入が終わり次第、高等学校から郵送してもらう形式をとった。調査期間は、平成15年2月16日から3月8日とした。調査票の記入方法は、各学校の自由裁量にゆだねたが、ロングホームルーム等の時間利用が多かった。

#### 4. 大学教育と高校生の進路設計

高校生を対象としたアンケート調査の結果から、現状の取り組みに対する感想(高校生が九大 OC に希望する授業内容)と、今後に期待する取り組み(大学側の取り組み、高等学校における取り組み)という2つの課題を考えてみよう。

##### 1) 授業内容と高校生が希望する高大連携事業

2003年度「九州大学人間環境学いつでもオープンキャンパス」は、平日の大学の授業に高校生が聴講生として参加するという取り組みであり、目的及び目標は、九大 OC が高校生の進路選択のガイダンス機能として支援すること、参加経験を通して、進路設計をする意思決定能力や情報活用能力、将来設計能力等を培うことである<sup>(1)</sup>。

九大 OC において高校生を受け入れている授業は、教育学部の専門教育の授業が中心であり、履修は学部2年生以上が受講対象である。

高校生は参加の事前に、授業のシラバスと授業内容、授業によっては参考図書との連絡を受けていた。このため、直前の準備は受講生である学生と同様に扱われている。ただし、学部生と基本的に異なるのは、高等学校の指導要領に記されている教育プログラムを修了していないこと、低学年次を対象とした教養課程を履修していないことである。

表3の結果は、高校生が九大 OC に希望する授業内容である。高校生は、九大 OC が提供している「専門的なレベルの高い授業」ではなく、「高校生にも理解できる入門的な授業」を希望しているのである。2003年度の九大 OC では、教養課程の授業である「化学入門」と「心理学入門」で高

表3 高校生が九大 OC に希望する授業内容

	高校生全体		参加の有無別*	
			参加者	不参加者
専門的で高レベルの授業	14.0	115	21.5	12.6
少人数授業	6.8	56	6.2	7.0
実験・実習のできる授業	24.5	201	12.3	26.8
入門的な授業	54.6	448	60.0	53.6
合計		820	130	690

単位：%，斜体：人数

\*p < .01

校生の受入れを行った。総参加者数(223名)の約40%にあたる89名が「化学入門」(25名)と、「心理学入門」(64名)の2科目に集中していた。これらの結果からも、高等学校における成績自己評価に関係なく、高校生は九大 OC に「高校生にも理解できる入門的な授業」を希望していることがわかる。また、不参加者で「実験・実習」希望があり、こうした参加型の授業に関心を持っていることも読みとれる。

## 2) 大学で行われる取り組み

つぎに、九大 OC を含めた、高校生が希望する高大連携事業の取り組みを考えてみよう。高校生は大学に関する情報をメディア、両親、高校の先輩等の知人を通して得ている。一般的情報だけではイメージが先行し現実をうまく把握できない。各大学は高校生の進路設計、学生募集のために、長期休業中・休日等を利用して、オープンキャンパスや公開講座、研究室訪問、大学紹介等を行っている。これらの取り組みに対する各大学の目的及び目標は異なるが、高校生にとっては、大学像をより具体的に確認する機会となりうるのではないだろうか。

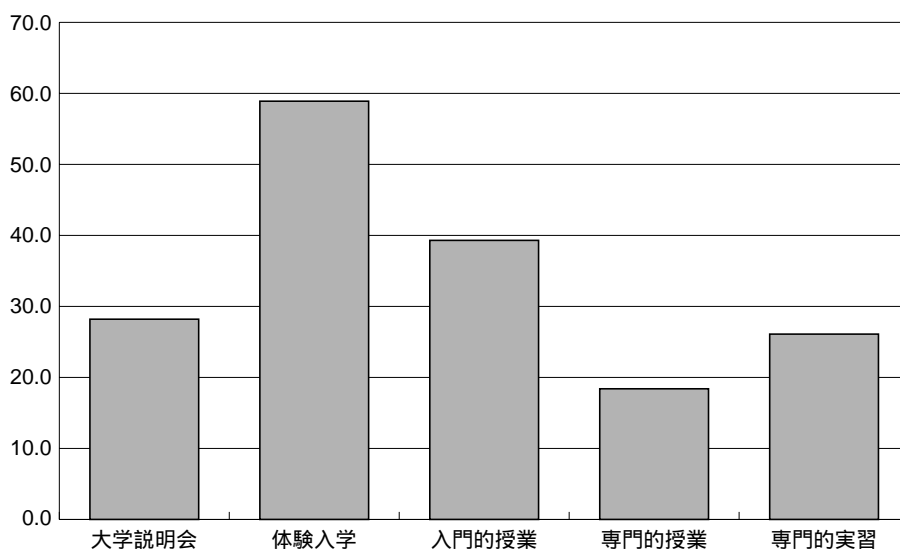


図2 高校生が参加希望する大学での高大連携の取り組み

図2は、高校生が希望する大学での取り組みを示したものである。高校生は、「体験入学(例えば、2日間大学生活を経験するというプログラム)」(58.9%)、「入門的な内容の授業への参加」(39.1%)、「長期休業中に実施される大学説明会」(28.2%)の順で、大学側での実施を希望していることが明らかになった。これは九大 OC に希望する授業の内容と同様の傾向であった。また、九大 OC の参加・不参加別の比較では、統計的に有意な傾向はみられなかった。

## 3) 高等学校で行われる進路学習との比較

高校生が進路選択に利用する情報の獲得には、二つのアクセスが関与している。第一に、大学を訪問するという地理的・時間的アクセスの問題、第二にメディア等の情報へのアクセスの機会である。第一のアクセスは、平日の高等学校の授業、大学との距離など高校生にとっては制約の多いも

のである。このため、第二のアクセスであるメディア（インターネット等）を利用する比重が高くなる。しかしながら、高校生の進路選択に関する情報を入手する手段と方法には、このような二方向からのアクセスが重要であると考えられる。

アンケート調査では、高校生は大学の情報を得るために、どのような高大連携の取り組みを希望しているのか質問した。質問項目は、大学内における取り組みと比較するために、高等学校内における取り組みという条件をつけた。

図3は、高校生が希望する高等学校での取り組みを示したものである。高校生は、「大学生による大学・学部・学科紹介」(51.2%)、「大学教員が高等学校で行う出前授業」(40.2%)、「大学教員の大学・学部・学科紹介」(32.5%)、順で、高等学校側での実施を希望している。また、「卒業生による進路相談」(22.4%)も比較的高い割合であった。この結果から、高校生は大学生や大学教員との対話を通して、進学希望先である大学の情報を得ることを望んでいることが明らかになった。

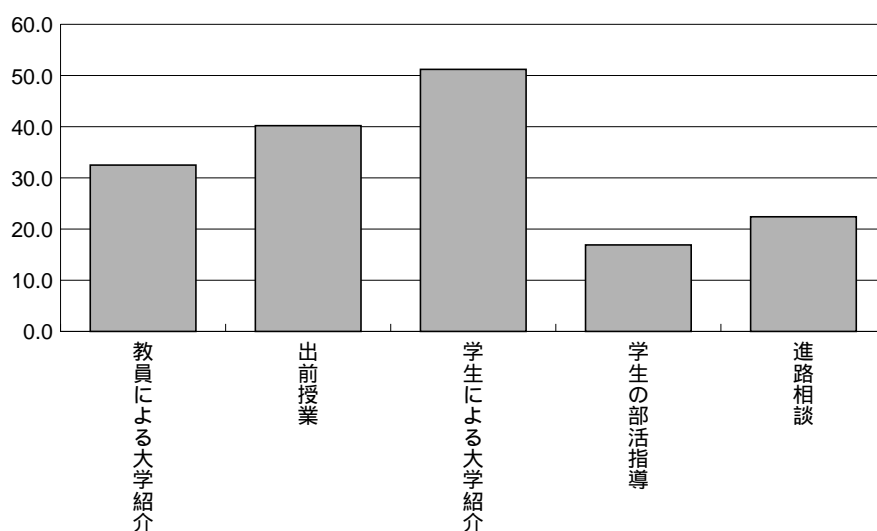


図3 高校側で実施する高大連携の希望

以上、高校生の希望する高大連携事業の形態からみて、高校生の進路設計に有用な取り組みは、大学側は「高校生も理解できる入門的な授業」を実施し、かつ「実習など」体験的に大学に入り込める活動を提供すること、高等学校側は「大学生、大学教員とのコミュニケーション」の機会を提供することであった。

## 5. 「キャリア教育」としての教育効果 授業参加の感想をもとにした事例検討

高校生が進路学習として希望する高大連携事業の取り組みは、大学側の取り組みとして「入門的な内容の授業への参加」「2 - 3日間大学生活を経験するという体験プログラム(体験入学)」, 高等学校側の取り組みとして「大学教員が高校で行う出前授業」「大学生による大学・学部・学科紹介」であった。これらと九大OCの取り組みを比較すると、九大OCは高校生のニーズを反映した取り組みとして位置づけることができる。

九州大学の教育体系は、教養科目を中心としたカリキュラムを履修する学部1年生と2年生、各

学部の専門科目を中心としたカリキュラムを履修する学部3年生と4年生に分けることができる。教育学部の場合は、教養科目が六本松キャンパス、専門科目が箱崎キャンパスで履修するというように、教育内容と授業を受ける場所が異なっている。これらをもとに、九大OCで高校生を受け入れた授業の特徴をみれば、箱崎キャンパスで開講した授業は、教養課程を学修した学生を対象とした専門的な内容の授業であり、学部2年生を対象とした講義形式の授業は、専門基礎としての機能をもつといえよう。九大OCの講義形式の授業の目的及び目標は、教育学専攻の基礎的・入門的な知識を伝達することで教育学への興味・関心を培うと同時に、教育学の専門的な知識を深めていくことである。特に、前者の領域に「キャリア教育」的機能が期待されるわけである。

そこで、九大OCにおける専門教育科目が、参加した高校生の進路学習の一環として有用であったかどうか、以下、ある授業科目を事例として取り出して、授業後に記入した感想をもとに、高校生の進路設計における九大OCの教育効果の可能性について考察していくことにしよう。

### 1) ケースとしての「教育法学」授業の特性

「教育法学 - 子どもの権利条約からみた学校・教育の諸問題 - 」は、教育学部の学部2年生から4年生を対象とした授業である。授業の目的及び目標は、学校教育を取り巻く法制度の具体例を取り上げることで、教育法学の専門的な知識を体系的に学修することとして、シラバスに説明がされている。

2003年度の後期に開講した「教育法学」は、木曜日の3限目(13:00 - 14:30)に行われた。九大OCとして高校生を受け入れるにあたり、授業担当教員が提示した条件は、受け入れ可能な日にちと高校生の参加数、そして参加する高校生に対して、「参加回数は、1回限りでも可能である」が、「学ぶ意欲のある高校生に来てもらいたい」という条件を提示した。高校生の参加は、11月6日から12月4日の5回に、福岡市内・市外の8高校から23名(受講回数2回の生徒が3名、受講回数4回の生徒が1名)であった。

### 2) 大学イメージの具体化

九大OCに参加した高校生は、二つの初体験をしたようである。第一に、大学説明会やオープンキャンパス等で夏期休業などの長期休業中に大学構内に入ることはあっても、平日に大学構内に入ること自体が初めての高校生もいた。第二に、大学が実施する授業・講座に関しても、祝日・週末や長期休業中に高校生を対象とした公開講座を受けた経験がある高校生もいたが、ほとんどの高校生が平日に大学の授業を受けるのは初めての経験であったようだ。このように、九大OCに参加した高校生は、限られた時間ではあるが、大学生の先輩とともに平日のキャンパスライフや大学の授業を経験することができたのである。

また、九大OCに参加することで、これまでテレビや雑誌等のメディアからの情報によって創られた大学イメージと自分の経験とを比較することができたようである。高等学校における進路学習の充実は、メディア情報に左右されないで、高校生がこれらの情報を取捨選択し、情報の価値判断・意志決定する能力が要求されてくるのではないだろうか。

次にあげるのは、この講義に参加した高校生A君の感想である。



初めて大学の講義を受けました。最初はテレビとかのイメージ的に堅苦しいのかと思っていましたが、実際にある校則を例に出したり、みのもんたが出てきたりしてとても興味がわく授業でした。高校の授業はただ板書をとって、問題をとくだけでしたが、大学の授業は話を聞き、実際にそれについて考えてみることもできました。90分の授業はいつもならとても長いけど、今回の授業はとても短いと感じました。【高校2年A】

彼は、九大 OC に参加するまで、大学の授業はメディアから得た「堅苦しい」というイメージを抱いていた。進学希望の彼は、進学を希望する大学の情報をメディアや高等学校の先生、高等学校の先輩等の情報源から得ていたようである。しかし、授業の感想からも分かるように、九大 OC に参加して、大学の授業に対するイメージを180度も変化させる場合もある。また、高等学校の授業と比較したA君は、大学の講義形式の授業は、「ただ板書をとって、問題をとくだけ」ではなく、受講者である自分も参加して授業を受けることができたと述べている。このように、九大 OC に参加することで、第三者がつくった進学先の大学イメージや情報を自分なりに選別して、判断する情報活用能力を獲得していくのである。

### 3) 授業内容の理解度と高校生の学力

大学学部での専門教育は、学部1年生と2年生に履修した教養課程の知識・能力を獲得していることを前提条件として行われているが、九大 OC に参加する高校生は当然のことながらその前提となる学習の途上である。したがって、九大 OC に参加する高校生にとって、学部2年生から4年生を対象とした教育学部の授業を理解することは困難ではないか、という懸念もありうる。

しかし、アンケート調査結果をみると、表4のように、九大 OC に参加した高校生は、80%以上が、参加した授業の理解度は「ほとんど理解できた」「だいたい理解できた」に入っている。さらに、高等学校での成績自己評価別の授業理解度でも、基本的に統計的な有意差はないが、むしろ成績中位上の場合に「まったく」「あまり理解できなかった」高校生が多くなっており、それ以下の成績の場合の方が理解度の高い傾向すらみられる。ともあれ、高校生の大学授業の理解度は、必ずしも高等学校での成績自己評価とは関連性がないのである。

また、事例として取り出した「教育法学」の授業後の感想をみても、同様に、高校生が授業の内

表4 高校成績と大学授業の理解度

理解度 成績	よく 理解できた	だいたい 理解できた	あまり 理解できな かった	まったく 理解でき なかった	合 計	
合計	20.7	62.0	14.1	3.3	100.0	92
上位	13.3	73.3	6.7	6.7	100.0	15
中位上	20.7	55.2	24.1	-	100.0	29
中位	17.2	69.0	13.8	-	100.0	29
中位下	20.0	50.0	10.0	20.0	100.0	10
下位	44.4	55.6	-	-	100.0	9

容を理解していることが明らかである。B君は、授業をとおして、日常生活で疑問視していなかった「子どもを『保護』する、という行為を誰が規定しているのか」、という問題意識が芽生えたようである。これはC君も同様で、「校則がなぜ必要であるのか。さらには、校則はどのように規定されているのか」等という身近な教育事象を扱うことで、自分の身近にある「校則」に対して、さらなる関心を抱いたようである。

第17条の「知る権利」で有害な情報から子どもを「保護」する。とあって、誰が「有害」と決め「保護」するのか？とあったけど、本当に誰が決めるのかが気になります。今日の講義はとても楽しくわかりやすくてよかったです。来週もよろしく願います！ありがとうございました！【高校2年B】

講義はすごく内容に入り込めて聞けて楽しいものでした。「校則」という1つの事柄からこんなに幅広く沢山の事を考えることができるなんてと驚きました。ぜひまた受講したいと思いました。【高校2年C】

以上のように、高校生は九大OCに参加することで、学部教育の雰囲気や教育内容・方法等を体験できる一方で、授業の参加後にも授業に関わる問題関心を抱き、あるいは進路を考えるためのキャリア教育的な教育効果を得ているのである。

また、高等学校の成績自己評価と授業の理解度は、アンケート調査の結果から関連性がないことが明らかになった。ようするに、学部教育は、学部生に対して各学部の専門的な知識・能力を伝達する機能に加えて、学部生と高校生に対して各専攻分野に関する知的能力の開発・向上を培う機能を果たしているのである。

#### 4) 高校卒業後の進路希望との関連

高校生が卒業後に希望する進路は、九大OCの参加者、不参加者ともに、約95%以上が大学への進学を希望していた。さらに、九大OCの参加者の約70%、不参加者の約50%は、九州大学への進学を希望していた。

九大OCの教育効果は、参加することで得られる「即時的な効果」と、参加後の進路選択をするうえで有効となる「継続的な効果」に分けることができる。この教育効果は、卒業後の進学希望先が九州大学以外の高校生にとっても、有効であると考えられる。高校生は九大OCに参加することで、平日のキャンパスライフの経験、大学の授業の聴講、学部の情報、大学の雰囲気を体験することができる。このような九大OCの経験は、進路の選択を支援する情報となることから、「即時的な教育効果」として捉えることができよう(A君の事例)。また、高校生は大学の授業を聴講することによって、大学への興味・関心を抱くとともに、身近な学校・教育事象に関して問題意識を抱くようにもなった(B君、C君の事例)。このように、九大OCに参加した高校生は、多様な情報や価値に対して、主体的に課題解決・価値判断する能力を獲得しているのである。高等学校在学中のみならず、卒業後のキャリアにおいても汎用性のある情報活用能力・意志決定能力・将来設計能力の獲得は、九大OCの「継続的な教育効果」として捉えることができよう。

九大OCに参加した高校生の感想から、九大OCの「即時的な教育効果」と「継続的な教育効果」

が表現されている記述を取り上げた。D君とE君の感想からも、九大OCに参加したことで、高等学校の授業との違いを経験することができ（「即時的な教育効果」）、九大OCの経験が主体的な進路設計を行う動機付けとなった（「継続的な教育効果」）ことが示されている。

今日はオープンキャンパスということで来てみたのですが、来てよかったと思います。私も将来は教育系に進もうと考えていて、非常に興味深い内容だったので楽しく受講することができました。【高校2年D】

わかりやすい授業でした。高校とちがって沢山考える場面があったのが興味深かったです。九大に興味がありました。【高校2年E】

## 6.まとめ

本稿では、九大OCに参加した高校生の感想、アンケート調査の結果から、九大OCが高校生のキャリア設計に及ぼす教育効果を仮説的ながら提示することができた。「キャリア教育」というのは、高校卒業後だけでなく、その先の大学卒業後までを見据えたキャリアプランを主体的に選択する能力の育成を課題としているとされる。九大OCに参加した高校生は、学士課程の専門教育の内容を理解することができ、さらには進路設計のために有用な情報を得ることができ（「即時的な教育効果」）、主体的な進路選択ができる能力を培うことができた（「継続的な教育効果」）のである。

学部2年生から4年生を対象とした専門教育の内容の授業を理解する上で、教養課程履修をしていない高校生の中でも、高い関心をもってオープンキャンパスに参加した者の中には、十分にその意義を理解し学習を深めることができる者がいることが明らかになったのである。九大OC参加者の感想から、高校生の進路設計におけるガイダンス機能に教育効果を及ぼすことが明らかになった。

### 【注】

(1) ベネッセ(2004)の図1(3頁)は、将来展望を踏まえた進路指導の在り方を示している。これは国立教育政策研究所「児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について」を参考に、教育現場の意見をふまえてチャート化したものである。高校生のキャリア教育、進路学習としての高大連携事業は、高校生の「情報活用能力」、「意志決定能力」、知的能力の開発としての「将来設計能力」、人間の社会化に必須の「人間関係形成力」を培うことを目的としている。九大OCは、参加回数が1回という高校生もいるため「人間関係形成力」の育成を支援しているとは考えられにくい。が、その他の3つの能力形成の支援を行う取り組みであると考えている。これらに関しては、『5.「キャリア教育」としての教育効果』で説明を加えている。

### 【参考文献】

福岡県, 2000, 『県立学校外の教育資源の活用について』。

ベネッセ, 2004, 「特集キャリア教育の視点と方法を探る」『進研ニュースVIEW21』(6号)ベネッセ教育総研, 2 - 11頁。

勝野瀬彦, 2003, 「高大連携～高校教育から見た課題と展望～」, 学事出版『月刊高校教育』4 - 12

月号。

文部科学省，2004，『キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書』。

中央教育審議会，1999，『初等中等教育と高等教育との接続の改善について』（答申）。

吉本圭一，2002「『高大連携を通じた授業公開』の研究開発」九州大学『九州大学研究紹介』No.19，  
99 - 100頁。